

フィリピンの台風ハイエン災害の追跡調査を行いました。(2015/1/8-9)

場所：タクロバン市、パロ市（フィリピン）
テーマ：「広域大規模災害における保健医療機関」

1月8-9日（木、金）にフィリピン レイテ島において、江川新一教授がタクロバン市、パロ市において2013年11月8日に同地に上陸した台風ハイエン（現地名ヨランダ）により甚大な被害をうけた10か所の病院を訪問し、台風ハイエンによる被害の状況、各病院における復興状況、今後の災害に対する備えに関してインタビュー調査を行いました。江川教授は2014年1月17-19日（被災から2か月後）にも第3次調査団の一員として同地を訪問しており、ちょうど1年ぶりに同地における保健医療機関の復興状況の調査を行うことができたものです。

台風ハイエンにより甚大な被害をうけた被災地は、現地で調査に同行してくれた通訳、セキュリティガード、運転手の方々によれば80%回復しているという言葉聞くことができましたが、まだ至る所に台風ハイエンの爪痕を見ただけではなく、2014年12月6-8日にハイエンと同じようなコースをたどって現地を襲った台風ハグピット（現地名ルビー）による被害があらたに加わった状況でした。また、1月はじめには大雨により標高の低い地域は洪水があったそうです。それでも町も人々も活気を帯びて復興に取り組んでおり、そのような中で訪れた病院の病院長、看護部長、災害管理者などのみなさんは急な訪問にも関わらず、快くインタビューを受け入れてくれました。ホテル、ショッピングモール、レストランなども新築されたり再建されていました。2015年1月15-19日にかけてローマ法王フランシスコⅠ世がタクロバンを訪問される予定になっており、大変よいタイミングで調査を行うことができました。

江川教授が訪れたのは以下の病院です。（訪問順）

1日目	2日目
フィリピン大学マニラ校保健医療大学	ディバインワード病院
シストソミアース病院	マザーオブマーシー病院
ベサニー病院（閉院中）	タクロバンドクターズ医療センター
レイテ州立病院	タクロバン産科医院
フィリピン大学タクロバン校	イースタンビサイヤ地方医療センター
アニボン地区（沿岸居住地）	
タクロバン市立病院	
RTR医療財団病院	

それぞれの病院が工夫をこらして病院の再建に取り組んでおり、フィリピン政府や海外からの支援は勿論必要ですが、フィリピン社会の逞しさをみる思いでした。災害から1年経過して振り返ることで冷静に当時の状況を聞くことができ、また、最近の台風ルビーによる再来襲が決して軽くはなかったものの、ヨランダの時とはまったく違う人々の事前対応を引き起こしたこともよくわかりました。多くの病院は可能なかぎりすべての器材、ベッドなどを2階以上に移動し、窓ガラスを厚いベニヤ板で塞ぎ、備蓄の食糧、水、非常用発電機などを準備しました。ルビーは人的被害こそ少なかったものの、強さはヨランダに近く、幾枚かの窓ガラスやドア、脆弱な屋根は破壊され、また非常に長時間現地にとどまったため、すべての人々の対応を大変長時間にわたるものとしたそうです。またそのあとに来襲したいくつかの小さな台風は降雨量のために土砂崩れを

ひきおこし、10名近い人命が失われ、備えの難しさを現地の人々が述べていました。

インタビューは、病院の基本情報、台風ハイエンによる入院患者と病院職員の人的被害、病院の構造的、非構造的、機能的被害（検査部、放射線部、薬剤部、栄養管理、コミュニケーション）、ライフライン（電気、水、飲料水、ガス）、外部からの支援状況と支援の種類、台風ハイエン前の備えと、ハイエン後の実施状況、将来の災害に対する備えについて行われました。ときには長時間に及んだにも関わらず、丁寧に答えてくれ、また、平常時においても現地の保健・医療事情が決して豊かではないことを教えてくれました。多くの病院が登録したベッド数以上の入院患者を抱えざるを得ず、再建後のベッド数増加を計画していることが明らかとなりました。WHOの台風ハイエンに関する保健医療の報告書においても、背景となる保健医療状況がはしかの予防接種状況など十分な水準を満たしていなかったこと、出産数が多いことなどから早期に必要な保健医療対策が取られています。

最後に訪れたイースタンビサイヤ地方医療センターでのインタビューにより、タクロバン市は同院をタクロバン市の北部の海峡沿いに移転することを決断していますが、同時に市街地の一部も移転させる都市計画を構想していることがわかりました。地域社会において病院は大変重要な役割を果たします。皆保険制度をとっているわが国とは異なり、フィリピンを含む多くの国では公立病院はより貧しい人たちのための医療を提供しています。地域で最大の公立病院であるイースタンビサイヤ地方医療センターの移転は街の健康に大きな影響をもたらします。保健医療機関は街の主要な産業でもあります。Build Back Betterが多くの人々のためであることが望まれます。

現地で通訳をしてくれた青年は病院での栄養管理に携わっていたことがあり、また、セキュリティーガードを務めてくれた青年は閉院したままのベサニー病院で勤めていたそうです。閉院したままの理由や、職員の再就職先で顔見知りと会うこともあり、今回の調査で大変有用な情報を得ることができました。災害は地域の人々の人生を大きく変えることもまた実感された調査となりました。調査結果は協力してくれた病院の方々を共著者として論文化される予定です。



閉院したままのベサニー病院



きれいに再建され稼働中のレイテ州立病院手術室、手前の天井ははがれたまま



シストソミアース病院の院長と江川教授



仮設住宅の集合トイレ



学園再建中の UPM-SHS 学長と江川教授



増築中のタクロバン市民病院



今回の台風ルビーにより再度破壊された RTR
病院のガラス窓



アニボン地区で打ち上げられた船により破壊された家の残骸。人々はまだがれきを焚いて食事をつくり、海上にトイレを作っている。電気は配線されているが、コメと飲料水は月に2回の配給が行われている。



ディバインワード病院の新しい病院管理者のシスターと江川教授



今回はじめて訪れたマザーオブマーシー病院。台風ルビーに備えて窓に張り付けた板がそのままとなっており、はがす予定もないとのこと。



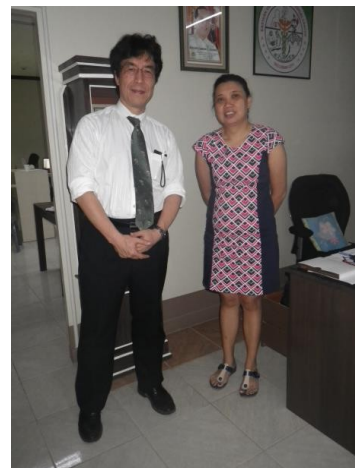
タクロバンドクターズ医療センターは台風ハイエンで破壊された正面のガラス窓をより厚いものに変更。まだ5階部分は屋根が再建されたのみで内部は当時のまま。



2014年10月に再開したショッピングモールで買い物を楽しむことができた。



100年続くタクロバン産科医院は必死の努力で再開にこぎつけ、正常分娩を扱っている。



地域医療の最後の砦であるイースタンピサイヤ地方医療センター長と江川教授
文責：江川新一（災害医学研究部門）